

「公印省略」

6 農林試第 7 7 5 号 - 7
令和 6 年 7 月 2 9 日

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 6 年度病虫害発生予察技術情報第 7 号について

このことについて、病虫害発生予察技術情報第 7 号「海外飛来性害虫の飛来状況（第 2 報）」を公表しましたので送付します。

技術情報第 7 号

- 1 作物名 水稲
- 2 病虫害名 海外飛来性害虫（セジロウンカ、トビイロウンカ、コブノメイガ）
- 3 発生状況
 - (1) 飛来状況
 - 1) 県内予察灯(5か所)では、6月12日から7月18日までセジロウンカ・トビイロウンカの捕獲が複数回確認された(表1)。コブノメイガは予察灯では捕獲されていないが、ほ場調査で食害や成虫を確認している。
 - 2) セジロウンカ・トビイロウンカの飛来日を6月24日、7月2日、7月11日と推定した(図1)。(「JPP-NET」の飛来解析・県内、近隣県のトビイロウンカ飛来状況を参考。) また、近隣県のコブノメイガ飛来状況、県内調査結果を基に、コブノメイガの飛来日を6月24日、7月2日、7月11日と推定した(図2)。
 - (2) 7月5半旬のほ場調査結果(セジロウンカ・トビイロウンカ)
 - 1) セジロウンカ
10株当たりの払い落とし成幼虫数は平均1.5頭(平年7.4頭、前年1.7頭)、発生ほ場率は41.3%(平年59.0%、前年31.8%)で、発生量は平年よりやや少なく、前年並であった。
 - 2) トビイロウンカ
10株当たりの払い落とし成幼虫数は平均0.009頭(平年0.018頭、前年0.818頭)、発生ほ場率は2.2%(平年12.4%、前年4.5%)で、発生量は平年・前年よりやや少なかった。

4 防除上注意すべき事項

- (1) 今後の飛来状況やほ場での発生状況については、病害虫防除所が発表する病害虫発生予察情報を活用する。
- (2) トビイロウンカは、田植時期や地域およびほ場毎の発生の差が大きい。また、育苗箱施薬剤を施用したほ場でも、田植後1か月以上経過すると農薬の効果の低下に伴い増殖しやすくなるので、発生予想パターン図を参考に、ほ場における発生状況を把握し、発生が多い場合は幼虫期に防除を行う。

＜要防除水準：幼虫の合計数＞

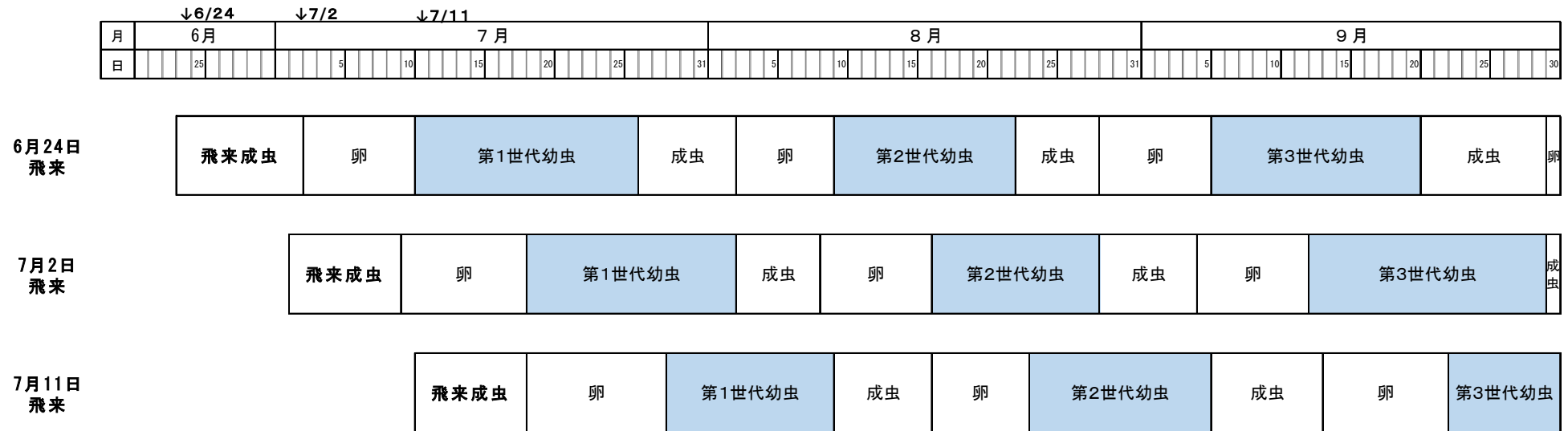
飛来後第1世代：20頭／100株

飛来後第2世代：100頭／100株

- (3) 無人航空機による防除を気温が高い時間帯に実施すると、薬剤の種類によってはイネの株元に到達する前に気化し、防除効果が著しく低下する場合がありますので、気温が上昇する前の早朝に実施する。
- (4) 防除に当たっては、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を順守する。
- (5) 病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。
「福岡県病害虫防除所ホームページ」 <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>

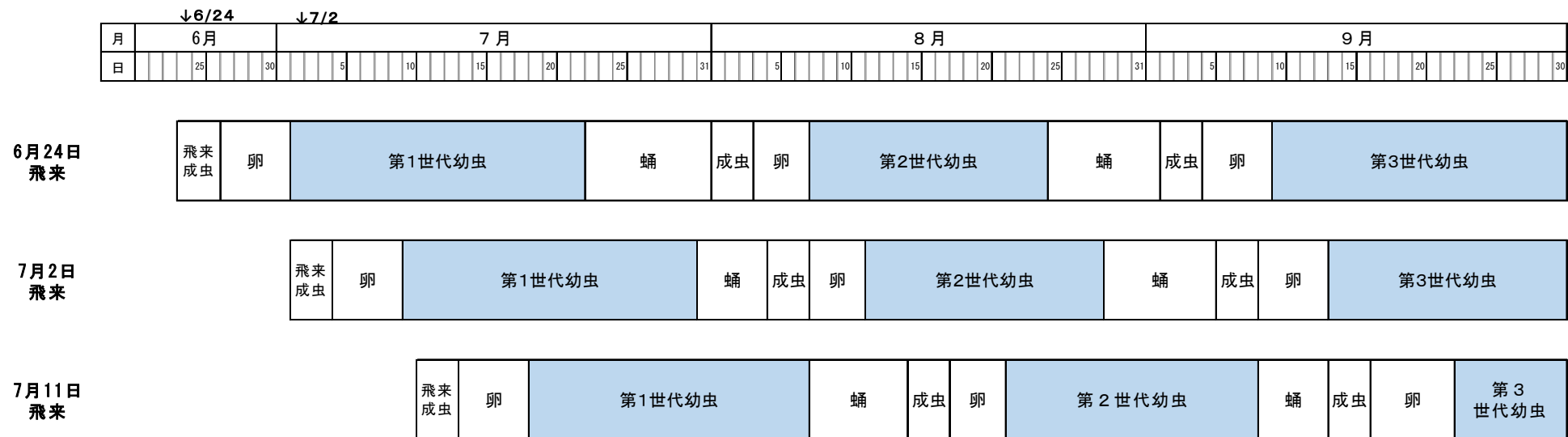


図1 飛来に基づくトビロウカの発生予想パターン図（第2報：令和6年7月29日作成）



- (注)
- (1) 発育零点12.0℃、発育上限温度28.5℃、発育停止温度33.0℃、有効積算温度（成虫期間100.0℃・卵期間109.4℃・幼虫期間189.4℃）
 - (2) 気温はアメダス太宰府を使用（7月28日まで実測値、以降は平年値）

図2 飛来に基づくコブノメイガの発生予想パターン図（第2報：令和6年7月29日作成）



- (注)
- (1) 防除適期は発蛾最盛期から1週間後である。
 - (2) JPP-NETの有効積算温度計算シミュレーションを用いて算出した。
 発育零点（卵13.0℃、幼虫12.5℃、蛹14.2℃）、発育上限温度28.5℃、発育停止温度33.0℃、有効積算温度（卵50.0℃、幼虫250.0℃、蛹90.0℃）
 - (3) 気温はアメダス大宰府を使用した。（7月28日までは実測値、以降は平年値）